**心理学実験実習（2017.5.26）　社会的影響　レポート課題　担当：川久保・沼田**

**大学生における社会的影響の実験**

**担当者：川久保・沼田**

**学生番号：16s21015**

**提出者：熊谷洸介**

**実験日：2017年5月19日**

**提出日：2017年6月16日**

**問題**

**判断や態度の形成あるいは行為の決定を行うさい、人は、他者の存在やコミュニケーションから様々な形で影響を受ける。このプロセスを称して****社会的影響という。本実験ではこのうち、集団や他者が設定する標準ないし期待に剃って行動する同調（conformaity）に注目する。Deutsch & Gerard（1955）の古典的実験には、知覚の自動光点現象（Sherif, 1935）と線分の同調実験（Asch, 1951）の実験が挙げられる。知覚の自動光点現象（Sherif, 1935）は、暗室内での好天の自動運動距離を報告さ焦る３人一組の判断実験を行い、最初に一人で判断するさいには３人が報告した移動距離の分散が大きかったにもかかわらず、３人の実験参加者が同室で判断を繰り返すうち、徐々に回答が収束することを示している。一方、線分の同調実験（Asch, 1951）は知覚の自動光点現象（Sherif, 1935）のように判断基準が曖昧な状況ではなく、明らかに間違いようのない判断においても人は同調してしまうことを示している。標準刺激の線分と長さの等しいものを３本の比較刺激から選ばせる際に、間違った回答をするようにあらかじめ指示された複数の実験協力者と同席させると、実験参加者の回答に引きずられ、多くの実験参加者が誤答をする傾向が見られている。以上のような同調を引き起こす社会的影響力としてDeutsch & Gerard（1951）は情報的影響と規範的影響の２つを指摘している、前者は知覚の自動光点現象（Sherif, 1935）の実験のように正しい解を見つけられたり、適切な判断や行動を行うために他者の意見を参考にするために生じる影響力である。これに対して、後者は線分の同調実験（Asch, 1951）の実験のように、他の人からの賞賛を得られたり、罰を避けるために、他者や自分からが所属する集団からの期待を考慮して影響を受けてしまうことを指す。日常的には、２つの影響力は並存することが多く、それぞれが判断に影響をもたらしていると考えられている。本実験では、上記の２つの影響力のうち、情緒的影響に着目し、複数の個人が同一の、曖昧な事象の判断を行おうとするとき、他者の判断結果の情報が提示されると、個人の判断にどのような影響が生じるのか、すなわち同調が生じるのかどうかを検討する。そこで、これまでの知見を考慮すると以下の仮説が考えられる。**

**仮説:他者の判断結果が提示されると、その影響を受けるため、個人の判断は変わる。**

**方法**

**実験デザイン　一要因（フィードバックの有無）の実験参加者間デザインである。独立変数は、フィードバックの有無、従属変数はビー玉の個数の推定値である。**

**実験参加者**

**東京未来大学の学生、男性16名、女性10名**

**実験器具**

**ビー玉250個を入れた瓶２つ、記録用紙一人当たり２枚**

**フィードバック値の算出**

**実験群の１回目の判定値平均値に100を加えたものをフィードバック値とした。フィートバックをした値は269個になった。**

**手続き**

**はじめに、実験参加者を無作為に統制条件（１３名）と実験条件（１３名）に分けた。その上で、まず統制条件群を別室へと移動させた。「数の判断に関する性格で迅速な判断プロセスに関する実験」というカバーストーリーを提示し、各群共に、瓶に入っているビー玉の数を判断するよう教示した。ビー玉の入った瓶を５秒間提示した後に数の判断を求め、記録用しに記入するように指示した。実験条件においては、記録用紙を回収した後、そのグループ全員の判断の平均値をフィードバック値として提示した。その後、再度ビー玉の入った瓶を５秒間提示し、２回目の判断を求め、記録用しに記入するように指示した。統制条件においては、１回目の判断の後に、実験条件と同じ感覚をあけ、再度ビー玉の入った瓶を５秒間提示し、２回目の判断を求めた。なお、人数宇野関係から、瓶を提示する際には、小集団に分けて提示した。**

**結果**

****

**実験群と統制群における各試行の判断値の標準偏差を表１に示した。また、****各群の平均値と実験群に与えられたフィードバック値の関係を図１に示した。統制条件では、１回目と２回目の判断値がほとんど変化していなかったのに対して、実験条件では、１回目は２回目よりも推定値が多かった。２回目の推定値の平均値は、フィードバック値である269個に近づいていた。また、実験条件においては、１回目の判断値の標準偏差は、２回目の判断値の標準偏差と比べて、少なかった。その一方で、統制条件においては、１回目の判断値の標準偏差は、２回目の判断値の標準偏差と比べて、少なかった。以上の結果から、本研究が提示した仮説（他者の判断結果が提示されると、その影響を受けるため、個人の判断は変わる。）は支持されなかった。統制条件では、１回目と２回目の判断値がほとんど変化していなかったのに対して、実験条件でも、１回目と２回目の判断値がほとんど変化していなかった。２回目の推定値の平均値は、フィードバック値では269個に近づいていた。また、実験条件においては、１回目の判断値の標準偏差は、２回目の判断値の標準偏差と比べて、少なかった。その一方で、統制条件においては、１回目の判断値の標準偏差は、２回目の判断値の標準偏差と比べて、少なかった。以上の結果から、本研究が提示した仮説（他者の判断結果が提示されると、その影響を受けるため、個人の判断は変わる。）は支持されなかった。**

**考察**

**本研究の目的は、他者の判断結果が提示されると、その影響を受けるため、個人の判断は変わることを実験で検証することであった。そのため、瓶に入ったビー玉の数を推定させる課題を行う実験を実施した、実験では、２回の推定が行われ、その推定値の測定の間で実験の操作が行われた。具体的には、統制群と実験群に分け、統制群に対しては、2回の推定の合間にフィードバックを行わなかったことに対して、実験群では、推定の合間に、1回目の推定の平均の値に100を加えたものをフィードバック値としたものを知らせ、2回目の推定を行なった。**

**実験の結果、仮説が支持されなかった理由として、先に実験行った統制条件群の人が、後に実験を。行った実験条件群の人に実験内容を教えてしまったことが考えられる。**

**引用文献**

Asch,(1951).Effects of group upon the modification and distorotion of　judgments. in 　　　　H.Guestzkow(ED.),Groups,leadership and men.Carnegie Press.Pp.1-43.

Deutsch,M,& Gerard/H/.B.(1955).A study of mnormative and infomational social infiuence upon individual judgment.Journal of Abnormal and Social Psychology,51,629-639.

　Sherif,M.(1935).A study of social factors in perception. Archives of Psychology,No.187.